



子供讚歌 (一〇)

倉橋惣三

九 古くして新しきものを訪ねる

1 ヨーロッパの美術館めぐり

新しい新を怠つてはならぬが、古い新も忘れてはならぬ。といつて、『世に新しきものあるなし』との古語にさとりを開いて仕舞う譯ではないが、眞に通ずる新は、古いものゝ中にも永遠の輝きを失わない。根が新人型でない彼が、新を新としての鮮かさを見たアメリカ研究の後に、ヨーロッパの旅に豫て心組みしていたプログラムには、そういう深求がいられてあつた。殊に、日本でもアメリカでも複製でしか見ることのできなかつた美術の原作に接する機会を得たことは、彼の長年の待望をたんのうさせた。彼の旅は勿論美術遍歴ではない。いわば道草のようなものだが、その道草の中でも、ロンドンのナショナル・ガレリーに何度も通つてその前に立つたレイノルドの幾つかの大作。パリのルーブルで特に一番上の階上まで登つて、そこに數多くの所蔵されてあるミレーのエツチングの中に探し求めた素描小品。わざ／＼それ一つのためにベルリンから出かけたアムステルダムのリークミュジアムのレンブラントの「ナイト・ウォッチ」その他到るところで立寄つた美術館で、彼の癖の『繪の子供』のオリヂナルに觸れる幸は度々あつた。これは、『子供讚歌』の中では、決して道樂とはいえない。そうした幸の中でマドリッドへ行つてムリローの原畫を見る暇のなかつたことは、後まで心残りだ。しかし、その代り、イタリーの各地の美術館で、觀賞というよりも驚嘆させられるマールルの大作に交つて無數に陳列されている『塑像の子供』に澤山に接することのできたの

は、普通高名の作家のものしか知らなかつた素人にとつて、期待外の幸であつた。立體美術は運動感覺が美の中心になつていただけに、子供の潑刺たる姿態動作を實體的に活き／＼と表現している大きな長所がある。ローマでも、ナポリでも、わけてもフロレンスのミューゼ・オナチョナルで、彼は之れらの『子供』のたくましい力の前に、たえず目を見はつた。子供の眞の美は抱いてみなければ分らないとは彼の持論だが、素より手を觸れることは許されないうも、これらの裸の『子供』の、このマーブルの肌のなんと温いことか。このブロンズの筋肉の何んと柔かく盛り上つてゐることか。彼はいつまでも立止つては息をこらした。ミケロアンジェロやラファエルでは、藝術の前に頭がさがる。これらの『藝術の子供』では、藝術を超えて子供そのものに、更めて感嘆する。

2 ベスタロツチ遺跡巡禮

古くて新しいのは藝術の特質である。眞の藝術は人間の小さな手で拵えあげたものでないからである。同じ意味で古くて新しい教育をベスタロツチとフレイベルに見出す。それもベスタロツチ・セクタリヤンやフレイベリヤンでなくて、その教育精神に突き入つてゐる。精神はぢかに觸れることによつて、最も力を與えられる。二人の大教育者が今あるならば、彼は必ず直接に訪ねて、目の前にその人を見るであらう。遺跡を巡禮するのは、その代りである。その學說や方法論を聴くよりは、その人に會いたいのである。せめて遺跡に佇立默想してその人のありし日を實感したいのである。

巡禮には御詠歌がつきものときまつてゐる。しかしこゝでは四國通路の御詠歌では通じない。彼は行く／＼『子供讃歌』を唱えた。ベスタロツチ巡禮では、『こどもにまなべよ』と。フレイベル巡禮では、『こどもとともにいきまかな』と。遺跡では原語のまゝが響きがいゝ。

三十三所ではないから、巡禮に順序はない。彼の足も、必ずしもその誕生の地から終焉の地へと、順を追わなかつた。専らアイゼンバーアン（鐵道）の都合によらなければならぬし、土地不案内の行者は、まわり道をしたり、あともどりをしたりする。それに傳記によつて克明に目星をつけたものゝ、たゞそこに立寄るといつたところもあれば、御詠歌を長く唱えるといつたところもある。たとえば、フレイベルでは、誕生の地、オーベルワイスパツハでは、フレイベル自傳の最初の部分を、心に讀みかえす大切な土地であると共に、周圍の山を望み、昔のまゝかと思われる垣

のまわりを緩歩しながら、その邊でひとりぼつちで遊んでいる幼児フレールベルを心ゆくばかり回想したし、家の中に入つてゐる／＼見せて貰つたりしたのであるが、ペスタロツチのチエウリツヒは、その幼時の生涯の最も重要な部分であるけれども、にぎやかな人通りの街路に接する町家風の建築が、しつとりした回想にふけらせるには堅すぎる。それに、その家の外壁にある『ハインリツヒ・ペスタロツチこゝに生る』という札や、市の中央にある立像などが、歴史の上のペスタロツチといつた記念感を與えて、却てなま／＼しい回想を誘ひ湧かせない。彼は足を移して市のペスタロツチ記念博物館に入り、有益な研究資料は見たが、山村オーベルワイスバッハのような豊かな巡禮の情緒は得られなかつた。

その代りといつては妙だが、ペスタロツチの教育精神の最初の生誕の地ノイホフは、全く深い巡禮情趣に彼を没した。ノイホフはほんとうに靜かな村である。田甫中の小さなマツチ箱のようなステーションから、ひと通りもない一本道が、右にペスタロツチの昔の學舎のあつた丘つゞきの低い山を背にして、ひつそりと眠つてゐるといつた風である。彼の撮つて歸つたフィルムにも林檎林や牛のいる牧場などでその感じを出そうとしてゐる。彼はひとりでその淋しい位の道を行つたり來たりしつゝ、ふとしたら憔悴したペスタロツチに、ばつたり行き會ひはせぬかと思つたりした。この古くて最新しい教育者が、子供の生活に初めて觸れたのも、更に我が子というものを初めてもつたのも、こゝだつたのである。いろ／＼の形でその『子供讃歌』（このまゝの字を用ゐるのは少々僭越だが）を書き初めたのもこゝである。『子供讃歌』の續篇『母性讃歌』が書かゝれたのもこゝである。彼は程近いビルの村にある記念碑のあの有名な頌辭よりも、却つて村の閑寂の中にペスタロツチその人の聲のない聲を聴くような氣がした。

リユツェルン湖は、數多くの美しいスイスの湖の中で、彼がその畔に宿つた最初の湖である。朝早くホテルのすぐ下の棧橋からモーターボートに乗つて、兩岸の山影を漣に涵す清い湖面を渡る。やがて靜かな村に抱かれた細い入江に入つてボートに訣れる。そこがスタンツの村である。ペスタロツチが、あの戦災孤兒院の長として、同時に兼看護夫として、兼僕婢として、そうして教師として、日夜の奉仕に精魂をすりへらしたところである。彼はこゝをペスタロツチ巡禮中でも、最も貴い聖地として豫て心に深く描いていた。そのスタンツである。その古びた院舎は、尼さんの寮になつていたが、その中に立つて目を閉ぢると、あの有名な繪『スタンツにおけるペスタロツチ』の憐れな孤兒病兒に取り圍まれてゐる貴い姿が、あり／＼と見えてくる。彼は、その後のペスタロツチの教育學說を素より貴重に

思うが、ノイホフの惱みと、スタンツの慈愛とにこそ此の人のこゝろを敬慕するのである。その時ペスタロツチは師範學校長として推薦せられ、學校教育者としての立派な位置を約束されていたのである。それを、この戰災孤兒院の創設を開いて、自ら進んでこゝに身を投じたのである。そうして健康をやぶるまで働いた。ほんとうに身を捧げて働いた。眞の聖地が苦難の遺跡であることは、多くの宗祖の場合のみに限られない。子供のために苦業することの足りない彼は、その『子供讃歌』をこゝで高唱することを愧ぢた。又、子供の生活を慈育するといえ、その身體の保護に専らにして、その精神を護り育てることを忘れ、子供の精神を教育するといえ、その知能の指導に専らにして、その生活を助け導くことを忘れ、忘れないとしても別個の事業とし、文教とか厚生とかの片手片手に分れて、ほんとうに兩手で子供を抱かない兒童愛の分業を、ペスタロツチの全的兒童愛に對してひんしゆくせざるを得なかつた。ペスタロツチがこゝに來たのは、教育事業よりも慈善事業を選んだといつたことではなく、子供らの生活の愛護の中に子供らの魂の生長を護ろうという志からであつたことは、屢々心なき時人の誤解を受けた程教育的であつた。またしても理論的言ひ方になるのを怖れるが、師範校長として教育を教育として抽象的に行うことにあきたらなかつたのではあるまいか。

ブルグドルフでは、直觀主義教育理論發展の地、イヴェルダンでは新教育の世界的名聲の地として、教育學者としてのペスタロツチの大を考えさせられることが多いのであるが、彼が巡禮者として當時を偲んだ生きた追憶はそれではなかつた。ブルグドルフでは、近くの河原で子供らに小石を拾い敷えさせながら自分も一緒にだまつて拾い敷えているペスタロツチの横顔であつた。イヴェルダンでは、古城の室に子供らにすがりつかれてゐる、(イヴェルダンの町の銅像のように)ペスタロツチの姿であつた。しかも巡禮の心を最も深くしたのは、町の郊外にあるアンナ夫人の墓である。彼はその墓の前に立つて、この貞淑な夫人がペスタロツチ崇敬者達の如何に大きな感謝の對象であるかを回想した。——まだ若いチユーリヒ時代のことである。成功せる商人としての父はその愛する娘と、世間的には餘り見込みのありそうでもない純情の夢想青年との結婚を、初めはそう喜ばなかつたらしい。しかし、アンナはペスタロツチの純情と夢想に似た理想とに嫁した。結婚前取り交わされた、互の將來の理想を語るきまじめな心の手紙は數百通にのぼつてゐる。アールガウの村での新家庭では、夫と共にじみな農村生活に入つた。ノイホフの耕地事業と貧兒教育とは、彼女の持參金が委く役立て盡された。それにづく貧困と窮乏とは、妻として母としての苦勞にやつ

れ切つた。それからスタンツ、ブルグトルフ、イウエルダント、世間的にはいつも失敗の連続といつていゝペスタロツチに生活の内助者、理想の伴侶として、一生を捧げた。そうして、社會の誤解、弟子の離反では、身邊必ずも常に幸福でなかつたペスタロツチに不斷一貫の人間の幸福を豊かにした。彼女の死後ペスタロツチが如何に人生の淋しさに堪え難かつたであろうか、夜になるとは此の墓を訪うたという老人の切々なる哀痛が察せられるのである。

ブルグの小邑にあるペスタロツチの終焉の家は、此の絶生の大教育者が世を去つたところとしては、なんの風情もないさゝやかな二階建の町家である。俗氣のある巡禮者は一寸驚いた位であるが、「すべてを人のためにして、己のことを求めなかつた」聖者には、却て心安らかな永眠の床であつたかも知れない。ペスタロツチは一八二七年に死んで仕舞つたのではない。

3 フレーベル遺跡巡禮

スイスもいゝが、南ドイツもいゝ。殊にフレーベル聖域といつていゝチュリンゲン地方は、シユワルツワルドの森の自然と共に、素樸な山村風俗が、彼の心を安易にゆつたり慰めた。アメリカやイギリスやフランスのような磨きこまれた文化に驚かされることもなければ、餘りにもきれいなスイスの自然にうつとさせられるのとも違つて、幾日のひとり旅にも、幾夜の泊り泊りにも疲れを知らない。それも一つには、行く先き先きでフレーベルが迎えてくれたせいかも知れない。

彼が先づブランケンブルヒで汽車を降りたのは、霧の深い冬の夜だつた。街燈もほの暗い驛前の廣場に立つた瞬間、そこに提灯をもつた數人の若い人が待つていて、『ようこそ速くから。フレーベル先生からのお迎えです』と親しく言葉をかけて呉れた。と思つたのは幻想としても胸がどき／＼する。彼はその幻想をなおつゞけながら、驛から近いホテルまで暗い道を歩いた。一と通り大きい宿だが、木造りなのが嬉しい。二階の室の窓を一寸あけて見ると、しつとりした夜氣の向ふに黒い森があつて、どこかでせゝらぎの音がする。——これも幻想だつたかも知れない。

ブランケンブルヒは、いうまでもなく、フレーベルの幼稚園發祥の地だ。しかし、その前に先づ／＼オーベルワイスパツハの誕生の地に巡禮しなくてはならぬ。その豫定を宿の人に告げて準備を頼むと、『あんな山の奥へですか』といつて、けゞんな表情だつたが、フレーベルの生れた家へと附け加えると、『そうですか。分りました。明朝は早

くお出かけがいゝでしよう。ではおやすみなさい、お客さま』といつて、ベットのスタンドをともし、静かに出ていく。天井の電氣を消すと、けばく／＼と壁紙の色が床しくおつとりとしていて、フレイベル先生の家のフレムデン・チンマー（客用の寢室）にでも泊めてもらつてゐるような氣がする。幻はいつか夢に入る。

翌朝は霜が寒い。というのは日本流の形容で、霜どころか樹氷に飾られて、息をするのも冷い。馬車が用意されていて、その腰かけの下には熱い湯たんぼが入れてある。宿の人が毛布をもつて来て、腰を包んで呉れる。車が宿の横を曲つて、動き出すと、そこにはもう深い森の徑である。密樹をくゞり、溪流に沿うて、だん／＼登り坂になる。岩道は馬車を、こつとん／＼ゆつくり行く。やがて、一應登りきつた頃に、打ち開けた高原になる。オーベルワイスバツハに來ましたと御者がいう。彼は車のとまつた小亭で田舎風の朝食をすませて、馬車はそこに殘しておいて、フレイベルの生れた家を訪ねた。村道に沿うて低い籬に圍まれた小さい家だ。その籬は幼児フレイベルが木の芽を見つめたところとして、自傳でなじみがある。家の後ろは野になつていて、幼児フレイベルの、獨りで遠くの山を眺めてゐる、しよんぼりとした後姿が想われる。今住む人に乞うて内部をも見せて貰つたが、父を怖れ繼母に親しみがなく育てられ、幼いときから瞑想癖のついた幼児フレイベルの性格の内部をこそ、この淋しい村の家に來て、しみじみと視せて貰つたといおう。

ブランケンブルヒの暫くの滞留は、そこにあるフレイベル記念館での資料研究とカイルハウのフレイベルの住居と學園の跡を訪うことで、完全にフレイベル當時のブランケンブルヒに住む心でつゞけた。カイルハウは峠を越した裏山といつた位置にあり、その家には昔のまゝが藏せられてゐる。彼は二階の一室を自由にさがしまわる許しを得て、古い恩物をあれこれと引出して見てゐる中に、『人間教育』の初版を二冊見つけ出した。フレイベルの此の名著は實にこゝで書かれ、こゝで刊行せられたのである。これは期待もしなかつた、いわば掘出しの寶物で、懇請の結果その一冊を譲つて貰つた。こうした豫め望んだでもない幸運の發見もあつたが、フレイベルが峠の上からブランケンブルヒを見おろして、キンダーカルテンの名稱を初めて思いつき、聲を立て、叫んだら山々が共感（こたま）したといふ、あのゆいしよ深い地點は、或は見出せるのかと楽しみにしてゐたが分らなかつた。考えてみれば、分らないのが當り前であるが、巡禮するものゝ心としては失望であつた。たゞ、あすこゝ歩きまわつて、此邊だろうと見當つて、キンダーガルテンと高い聲を出して興じたのは、聲の幻といつていゝものだつたともいえよう。傍に人が居な

つたからよかつたことだ。

フレーベル記念館は、泊つていたホテルから近い。彼は特に來訪の意を告げて、いろ／＼の珍藏を手にとつて見ることの許しを得た。一つ／＼貴重な資料でないものはないが、その中で、『母と子の愛撫の歌』の初版を発見したのは、カイルハウでの発見に並ぶ喜びであつた。二冊ある中の一冊を是非譲り受けたいと懇願したら、博物館委員會を開いて協議の上ということ、滞在を延ばしてその結果を待つたが、望みのかなつたことは、何んたる幸であつたらう。博物館に近い昔の幼稚園の建物は、特に何んの回顧の遺物もなかつたけれども、巡禮者としては、そこを低徊し、そこに佇立するだけで、萬感交々たるものであつた。それと共にウイルヘルミーネ夫人の墓も、深い敬意を捧げずにいられない巡禮の場である。老年のフレーベルのために、第二の夫人ルイーゼの共働と、殊に死後の事業の發展の功績の大きかつたことも記憶せられなければならぬが、若き日からのフレーベルの心の内助者としてのウイルヘルミーネ夫人の、蒲柳の質の身體に包まれた輝く聰明と豊かな愛情とは、フレーベルの大成の上に深く感謝しなければならぬところである。世界はその恩人の良妻を忘れてはならぬのである。ペスタッツのゾーナと共に。

かくてブランケンブルヒの多くの收獲の後に、彼のフレーベル巡禮の最大の聖地は、リーペンスタインにある。そこには、老熟したフレーベルが、村の子たちに親まれたマリエンタールの幼稚園の跡があり、若い女性たちに尊敬せられた保母養成所の跡があり、温泉客らに馬鹿爺さんといわれながら幼児等と没我の遊び相手になつた森がある。フレーベルを研究する爲よりは、フレーベルの精神にぢかに觸れることを祈願する巡禮者としては、どの地にましても貴いのはこゝでなければならぬ。彼は馬車をすてゝその森の丘に登り、美しい午後の日光に浴しながら、徘徊し、願望し、感興に印銘し、フィルムに撮映し、東京に歸つた後環境の記憶と生々しい想像のまゝを、寺内萬次郎畫伯に詳に述べて、フレーベルの眞の姿を活寫して貰つたことであつた。彼はフレーベル記念館から譲られて歸つた世に普くあるフレーベルの生眞面な正面像よりは、この畫こそ、眞にフレーベル巡禮者の奉納額といつたものであると思つてゐる。

彼のフレーベル巡禮は、此の聖地に近きシユワイナの村端の墓詣を以つて終るが、そこで彼が案内の馬車屋の少女から聽いたフレーベルへの言葉は『子供の友達』というのであつた。彼が落葉深き墓の前に立つて、その少女を顧みて此の墓の人に就て試みに問うて見た時、言下にキングダーフロインドという答を得て、如何に破顔して喜んだこと

あつたらう。彼はその少女の肩を軽く抱き、ブロンズの髪を撫で、やりつゝ、思わず『グート』といつた。實によいかな、子供のたくまざる短い言葉よ。彼はその前、恩物を象つたその墓碑に對して、『東洋の巡禮者は、あなたの教育方法にはいろんなことを考えますが、あなたの教育精神には萬腔の尊敬と禮讚を捧げるものであります』と告げたりした。ちたさを、少しくきまり悪く思つたりさえした。『キングダーフロインド』それだけでいゝ。この少女の言つて呉れた言葉のお蔭で、この巡禮記を『子供讃歌』の眞の一節とすることができるのである。

われ／＼がペスタロッツチやフレーベルの教育説を、その名の故によつて貴ぶのは、まだ眞に到らないことである。すぐれた藝術の貴さは素よりであり、藝術家の偉大はいうまでもないが、しかし、われらは、その藝術家の偉大さによつて、美を見せて貰い感じさせて貰うのである。そうして、われらが自分で見つけ得ない『美』を見つけて貰うことを感謝するのである。大教育者に感謝するのも同じではあるまいか。われらが自分で見つけることのできない『子供』を見つけて貰うのである。そこで、大教育者への禮讚はその奥底においては、子供の禮讚に到り着くものでなくてはなるまい。大教育者達は、いわば偉大なる『子供讃歌』の歌い手、歌の主である。われらが大教育者の言を借りるのは、われわれの獨力では歌えない詩を、大詩人の詩で、歌わせて貰うのと同じ事であろう。つまり子供の見方、子供の感じ方を教えて貰い、助けて貰うだけ（その、だけが大きい）ことに他ならぬではなからうか。われらは謙虚に大教育者に學ぶが、いつまで人の力によるのかと、大教育者達に叱られるかも知れない。――が學ぶべきこと、感謝すべきことが、古人の古くして新しいものに多く存在するのを忘れることはできない。

それにしても、子供ほど常に新しく眞なるものはない。ペスタロッツチの『子供』も、フレーベルの『子供』も、昔の詩人藝術家の『子供』も、今われらの目の前にいる子供と變らなかつたし、今われらが愛する子供らと同じであつたに相違ない。皆ありふれた子供であつたのである。われらが、それを古人と共に觀、古人と同じく感じ得なかつたら、われ自ら耻しいことであるし、子供に濟まないことである。古人に教えられて、古人の『兒童讃歌』を歌つてゐるだけではならぬ。古人はわれ／＼に教えるだけでなく、われ／＼を蘇らすものである。見なれてゐる『子供』教へなれてゐる『子供』で鈍つたり曇つたりしてゐるわれ／＼の目を新に開かせる筈である。誰れに、何に、われ／＼の傍にゐる子供に、路上の子供に、そうして特に、われ／＼の愛する子供に對して。（つゞく）